

Title	エドムの斥候のあの美しい歌：大塚久雄記念国際シンポジウムに寄せて
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.23 別冊, 2002.3 : 13-16
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4095
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

エドムの斥候のあの美しい歌

——大塚久雄記念国際シンポジウムに寄せて——

大木英夫

大塚久雄先生を記念するこのシンポジウムは、必然的にヴェーバー解釈の問題と絡まざるを得ないと思います。そしてまた、それは近代の解釈、そして将来への展望と関わりをもつてくると思います。

それに関して、わたしは、まずこういうことを申しあげたい。ヴェーバーの学問の魅力は、その中に神学的隠し味がある、ということでありませう。そして、その隠し味を識別するためには、周到に訓練された強靱なる神学的知性を必要とする、ということでもあります。トレルチの思想に *Zwiespaltigkeit*（分裂緊張）を指摘する人がおりますが、トレルチの友人であるヴェーバーにも、いや、ヴェーバーにこそもっと強い *Zwiespaltigkeit* があります。そしてわたしには、そこに神学的隠し味が潜んでいるように思われるのであります。

彼は、その生涯の終わりに『職業としての学問』と『職業としての政治』という二つの講演を致しました。そこには学問と政治とのたしかに媒介し難いような分裂があります。しかし、これをもって、ヴェーバーを、学問と政治の間に開いたままの知的傷口をもった決闘士のように見てはならないし、或いは、その亀裂をスイス・アルプスの峰々の間に深く切り込んだ峡谷の村エンガディン（ニーチェの仮寓）の光景へと投影することも問題であろうかと思うのです。わ

たしは何よりもまず、その間にある分裂がもっている緊張にみちた無媒介に、その無媒介の「無」の中に、「過去二十年間の」リベラーレ・テオロギー（トレルチはその代表的ひとり）に向かつて「惨めな出来損ない」と断言するヴェーバーの拒否を感じ取ることができると思うのであります。ヴェーバーは、親しい友でもある神学者トレルチとは最終的に分裂している、それを感じさせられます。しかし、その神学者である友人との分裂においてヴェーバーは深く神学的であると思うのであります。この「無」において神学者トレルチよりも、ヴェーバーはもつと深く神学的であるように思われるのであります。

ヴェーバーは、神学的訓練のない日本近代の知性には、理解にただならぬ対象であると思います。小泉首相は、無知が人を大胆にするのでしょうか、国会答弁でわけの分からない「神学的議論」なる言葉を振り回しました。われわれはそれであつてはならないと思います。ヤスパースほどの偉大さをもつた哲学者の知性は、「究極においてはひとつの神秘」なるものを、ヴェーバーの中に見ております。その無媒介の「無」の中にも、その「神秘」が潜んでいるのではないのでしょうか。その「神秘」とは、*mysteria*というよりは *penetralia* という方がよいと思います。それは神学的透徹を要求するのであります。

彼は、『職業としての学問』と『職業としての政治』を、神学的含蓄をもつ「ベルーフ」という概念をもつて結びました。その概念のもつ神学的含蓄は、言うまでもなく、ヴェーバーこそよく理解したのであります。この二つの講演の前者においては非魔術化という「現代の宿命」の「無」を直視する知的誠実、後者においてはその「無」を克服する「新しい預言」をもつて立つカリスマ的指導者への期待が出ております。両者の統合があるとなれば、前者においては「ベルーフ」の非宗教化を極限までつきつめる否定性において、後者においては「ベルーフ」のもつ宗教性をどう回復するかを問う肯定性において、学問と政治とを弁証法的に包括するという統合ではないのでしょうか。この点で、彼は、トレルチの文化総合の「媒介」の企てよりも、「無媒介」をもつてはるかに神学的に緊張している、そうわたしは感じ

るのであります。

『職業としての学問』と『職業としての政治』、これら両者の「ベルーフ」による結びつきは、「神のなく預言者もない時代」において、どう預言者的伝統を再生するかという課題と関わるのであります。ヴェーバーは「新しい預言」ということを言っています。現代はそれを「持つていない」、だが、ヴェーバーはそこで終わるのではない、「持つていない」、だから「待つている」のであります。こうして、ヴェーバーは、「新しくかつ真正の預言」による「真の共同体」の形成への願いをもつて「エドムの斥候のあの美しい歌」に共感するのであります。『職業としての学問』は、これをもつて限界の彼岸へと目をあげております。

「エドムの斥候のあの美しい歌」の響きは、ヴェーバーが聞いて以来、学問的にも政治的にも深まる現代の闇の中に響きわたつて鳴りやまないのではないのでしょうか。ヴェーバーの知的格闘は、プレスナーの書のいわゆる『遅れてきた国民』、つまり近代化の遅れのもたらした「時代とのずれ」の中に立つドイツを舞台としたものであります。大塚久雄は一九四五年の敗戦後、『近代化の人的基礎』として出版された幾つかの文章を書きましたが、それは敗戦後の日本、つまり日本における「時代とのずれ」と取り組んだものであります。大塚久雄は、その状況に立つてヴェーバーを理解したというよりは、ヴェーバーによつて敗戦後の日本の状況を解明したということもできるかと思ひます。大塚久雄はキリスト者でした。神学を理解する人でした。それがヴェーバーの本質の理解において、またヴェーバーの日本への適用において、正確さを保持させたのだと思ひます。ヤスパースは、ヴェーバーの本質について、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を引き合いに出してこう書いております。それがいかに「没価値的、まったく客観的であるにせよ、マックス・ヴェーバーがキリスト教にたいしてどんな関係にあるかを、いわば間接の報告によつてわれわれに語るものである」（傍点筆者）。この解釈の線を大塚久雄は継承しているように思ひます。この線を、聖学院大学総合研究所は受け継ぎたい、そして更に発展させたいと願つております。聖学院大学総合研究所や聖学院大学

大学院は、本格的な神学研究の部門を、社会科学研究と平行してもっております。それなしには、この線にあつて近代の問題と深く取り組むことはできないのではないかと考えているからであります。